

5月25日（日）マルコの福音書3章20，21節

「これを聞いて、イエスの身内の者たちはイエスを連れ戻しに出かけた。人々が「イエスはおかしくなった」と言っていたからである。」（21節）

---

21節で「おかしくなった。」と言う人たちのうわさを聞き、身内の人たちが、イエス様を連れ戻しに来ました。もしかすると世間体を気にしたのかもしれませんが。いずれにしても「兄弟たちもイエスを信じていなかったのである」（ヨハネの福音書7章5節）とあるとおりに、イエスを信じていない家族の者たちは、イエス様のすることが理解できなかったでしょう。食事をする暇もないほど人々のために働いている姿や会堂で「あなたの罪は赦されました。」（2：5）と言ったことや罪人や取税人たちといっしょに食事をする事、また断食や安息日に関するパリサイ人との論争の中で、そのような疑いが生まれてきたのかもしれませんが。イエス様は真理を語り、またご自分が父なる神によって遣わされた使命に生きようとしていました。しかし逆にそれが人々の誤解を招いたのです。私たちが真理に生きようとするなら、また神からの使命に生きようとするなら、イエス様のように回りの人から誤解を受けることもあるでしょう。しかしそれでも私たちが恐れることなく神に従い続けるなら、神様はすべてを最善に変えてくださいます。実際に、使徒の働き1章14節には「彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた」とありますが、使徒たちと母マリアおよびイエスの兄弟たちがともに祈っている姿は、まさにイエス様の死後に家族が信仰へと導かれたことが分かります。

私たちの大切な祈りの課題の一つが未信の家族の救いです。その中で、なかなか救いへと導かれないうるか、信仰に関心を示さないとか、信仰について理解されず、反対されることもあるでしょう。しかしイエス様も自分の地上の家族から理解されない悲しみを味わわれました。しかし後になって信仰へと導かれ、使徒たちとともにイエスの家族が祈る姿は私たちに對する大きな励ましです。いつかは分かりませんが、必ず信仰へと導かれる日が来ると信じて、家族のために祈り続けましょう。

5月26日（月）マルコの福音書3章22～30節

「しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」（29節）

---

エルサレムから下って来た律法学者たちが、イエスがベルゼブルにつかれている、つまり悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出していると言いました。彼らは、イエス様の病の癒しや汚れた霊を追い出すなどの奇跡的なみわざを目の当たりにしていたので、それを否定することはできませんでした。しかし、それを通してイエス様を信じるのではなく、悪霊のわざとすることによってイエスをおとしめようとしたのです。そこには律法学者たちの悪意と自分自身の立場や知恵を誇ることによる霊的なつまづきを見ます。彼らにとってイエス様の御前に謙遜になることは本当に難しいことだったのです。

23～26節のイエス様の反論は明瞭です。もしイエスが悪霊のかしらであって、意図的に悪霊が他の悪霊を追い出すようなことをするなら、お互いの力のせめぎ合いとなり、それがエスカレートすれば内輪の争いへと発展し、最後には分裂してしまいます。そんなことになれば国も家も滅びてしまうように、サタンも滅びざるをえなくなります。つまり、そのようなことは決してありえないということで、イエスが悪霊や汚れた霊を追い出す働きは決して他の悪霊によるものではないということです。また27節の「強い者」とは悪霊やサタンを指していますが、ここでイエス様は、ご自分がサタンを縛り上げることができるほど、悪霊やサタンにまさる強い力と権威を持っている神の御子であることを証ししているのです。さらにイエス様は、ご自分が「神の御霊によって悪霊どもを追い出している」（マタイ12：28参照）とも言われています。

28節で「人の子らは、どんな罪も赦していただけます。また、どれほど神を冒瀆することと言っても、赦していただけます。」と言われました。赦されない罪がないことを思えば、神様のあわれみがどんなに深いものであるかをあらためて思わされます。しかし29節で「聖霊を冒瀆する者は、だれも、永遠に赦されず、永遠の罪に定められます。」と言われました。私たちは赦されない罪があるのかと驚きますが、唯一赦されない罪とは、聖霊を冒瀆すること、すなわち聖霊に逆らうことです。それは、聖霊の導きに対して故意に目を閉ざし、聖霊に逆らって罪を悔い改めず、なお冒瀆を続け、どこまでも自らを正当化し続けるなら、そこにはもはや罪の赦しはないということです。彼らは神の働きを目の当たりに見ていたにもかかわらず、あくまでそれを認めようとせず、聖霊に逆らってイエス様の働きを冒瀆し続けたのです。私たちに對して聖霊は罪を指摘し続けます。そのような時に素直に罪を悔い改めているでしょうか。聖霊の声に逆らって罪の生活を続けているならば、そこには罪の赦しはないことを知るべきです。

5月27日（火）マルコの福音書3章31～35節

「だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」（35節）

---

イエス様のもとに母マリアと兄弟たちとが訪ねてきました。32節には、「あなたの母上と兄弟姉妹方が、あなたを捜して外に来ています」とありますので、イエスの行方を捜すほどに心配して訪ねてきたのかもしれませんが。

それに対し、イエス様は「わたしの母とはだれのことですか。また、兄弟たちとはだれのことですか。」と言われました。（33節）これはイエス様が、マリアや兄弟たちに会いたくないので冷たい態度を取ろうとしたとか、知らん顔をしようとしたということではありません。またいっさいの血縁関係を絶つことを宣言したことばでもなく、決して親不孝を教えているのではありません。むしろイエス様は34節で、自分の回りに座っている人たち、つまり十二人の弟子たちを始め、他の弟子たちのことを自分の母、兄弟たちと呼ばれたのです。つまりイエス様は、天の神を父とし、またご自分が血をもって贖われた人たちによる、血縁関係によることのない新しい関係をここで宣言しようとしているのです。ですから35節で「神のみこころを行う人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」と言われました。神を信じ、神のみこころを行おうとする一人一人はイエス様にとっての兄弟姉妹であり、また母なのです。そういう意味で教会は神の家族であり、教会に集う一人一人は兄弟であり、姉妹なのです。そういう意味で教会が神のみこころを行う場所となり、また神に喜ばれる歩みや交わりがこれからもなされてくことをともに祈っていきたいと思わされますし、ともに神の家族として、互いに愛し合い、助け合って、神にある交わりの幸いを回りの方々に証ししていけるような教会とさせていただきたいと思わされます。

一人の方が、洗礼を受けることにおいて家族の反対で迷っていた時に、所属教会の牧師から、神に従う時には、愛する家族をも悲しませることがあるのではないですかとのアドバイスを受けたと証ししていました。イエス様もどのような思いで「わたしの母、わたしの兄弟とはだれでしょうか」と言われたことでしょうか。私たちにも、肉親との関係にまさって、みこころを行う場面がクリスチャン生涯においてあるかもしれませんが、私たちは何を優先し、何を選び取っていくのでしょうか。

5月28日(水) マルコの福音書4章1～20節

「良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのことです。」(20節)

---

ここでイエス様は、種を蒔く人のたとえを語られました。種を蒔く人が、種蒔きに出かけ、蒔いた種が道ばたに落ちて鳥が食べてしまいました。鳥が来て食べてしまうとは、サタンが心に蒔かれたみことばを取り去ってしまうことです。(15節) 道ばたとは、みことばを受け入れない心のことです。偏見とか、頑固とか、高ぶりとか、真理に従うことを恐れるとか、その他さまざまな理由で、心を閉ざしてみことばをはねつける心のことです。そのような心でみことばを聞くなら、サタンが容易にみことばを持ち去ってしまうことができます。そしてそのような人に対してはみことばは何の意味も持たなくなります。次に種が土の薄い岩地に落ちました。16、17節によれば、みことばを聞くと「すぐに喜んで受け入れるのですが、「困難や迫害など」の日が上ると根がないので枯れてしまいます。つまり受け入れる心はあっても、つまずきやすい信仰と言うことができます。本来、日の光は植物の成長には欠かせないものです。それと同様に、困難や試練は私たちクリスチャンの信仰の成長には欠かせないものですが、岩地のような心を持っている人にとっては、ただのつまずきを与えるものでしかないのです。それは信仰がその人の心にしっかりと根を張っていないからであり、物事を表面的にしかとらえられない結果です。別の種はいばらの中に落ちました。いばらとは18、19節を見ますと、「世の心づかひや、富の惑わし、その他いろいろな欲望」のことであると言われています。7節では「いばらが伸びて、それをふさいでしまったので」とあります。私たちの心の中はいばらが成長しやすい環境にあることを知るべきです。世の心づかひによって信仰生活がいつのまにかおろそかになってしまうことがあります。富の惑わしによって献金がおろそかになってしまうこともあるでしょう。そしてさまざまな欲望が私たちを教会の礼拝や集会から遠ざけ、ひいてはみことばから遠ざけ、そしてそのままにしておきますと、心はいばらである欲望でいっぱいになってしまうことがあるのです。そして最後が良い地に落ちた種です。20節によれば、それはみことばを聞いて受け入れ、実を結ぶ人だと言われています。

ここで私たちがおぼえておくべきことは、蒔かれた種であるみことば自体に問題はありません。みことばは真理であり、それは良い地に落ちたなら豊かな実を結ばせる良いものです。また蒔き方に問題があったのでもありません。集会や礼拝であっても、また日々のデボーションを通して、神様はみことばを語っておられます。問題は土壌である心にありました。今日の箇所からも、みことばを聞く時には人はさまざまな心の状態にあることが分かりますし、それをイエス様もご存じでした。それでは私たちはどのような心でみことばを聞いているでしょうか。また聞いたみことばを聞きっぱなしにせず、それを受け入れて、しっかりと心にとどめ、そのみことばに生きようとしているでしょうか。みことばが私たちの心に根づいて豊かな実を結ばせるために、常に私たちは自分の大切な心を見守らなければなりません。それとともに私たちがみことばを聞くことのできる恵みが与えられていることを今日も主に感謝しましょう。

5月29日(木) マルコの福音書4章21～25節

「聞く耳があるなら、聞きなさい。」(23節)

---

21節でイエス様はもう一つのたとえとして、部屋を照らすためにあかりを持って来ることをお語りになりました。

あかりを持って来るのは、升や燭台の下に置くためではなく、燭台の上に置くためです。(21節)それが22節につながり、「隠れているもので、あらわにされないものではなく、秘められたもので、明らかにされないものはありません。」とありますが、これはイエス様が来られることによる神の国の到来を指していて、イエス様が来られたことで、神の国がますます証しされ、宣べ伝えられることで今まで隠されていた神の国の奥義が明らかにされていくということです。それでイエス様は「聞く耳のある者は聞きなさい。」と言われているのです。このことばは9節のイエス様のことばに通じます。不信仰や偏見、批判をもって聞くなれば、決して神の国の奥義を悟ることができません。律法学者やパリサイ人たちは、イエス様の教える真理を決して悟ることがなく、イエス様が預言されたメシヤであるとは気がつきませんでした。私たちも常に語られるみことばに対する聞き方に注意していかなければなりません。

ですから24節で「あなたがたは、人に量ってあげるその量りで、自分にも量り与えられ、さらにその上に増し加えられます」とあります。この量りというのは、イエス様のことばをどのように受け取るかということです。つまり、それは量りで何かを量るように、イエス様のことばをどの程度のものと考えるかということであり、その態度によって与えられる恵みも異なるのです。もし聞く人がイエス様のメッセージを豊かに深く聞き取り、それをしっかりと心に受け留めるなら、神様はさらなるみことばに対する理解と祝福を与えてくださいます。しかしいい加減に聞いていたり、不信仰な聞き方をすれば、持っている恵みまで失うことになります。そのような聞き方をすれば、決して隠された神の国の豊かな奥義を悟ることはないのです。

昨日学びましたようにみことばを聞く時には、心が大切ですが、それと同時に聞き方も大切です、私たちはみことばをどのように聞いているのでしょうか。「聞く耳のある者は聞きなさい。」と言われているように、常に聞く耳を持つ者でありたいと思わされます。

5月30日（金）マルコの福音書4章26～29節

「実が熟すと、すぐに鎌を入れます。収穫の時が来たからです。」（29節）

---

イエス様はここでも、当時一般的に見られていた農作業の風景をもとにして、神の国について説明します。

最初に、「人が地に種を蒔くと」と言われています。この時代の農夫は、今のように丁寧に種を植えることをせず、あちらこちらに投げながら蒔いていたようです。このことは、神の国の福音が地のさまざまな場所において証しされ、宣べ伝えられていることを意味しています。さらに、「夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが」（27節）とありますけれども、これは、農夫が怠けていることを責めようとしているということではなく、ある程度の時間が経過したことを言おうとしていると思われませんが、それと同時に、種が芽を出して育つには、天候にも大いに左右されますが、それはすべてを治めておられる主のみこころによることです。「どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。地はひとりでに実を実らせ」とありますように、種の中にこそ生命力があり、地がそれを育てるのです。これらもすべて神の御わざです。「初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がはいります。」（28節）とありますように、神の御国は神様のみこころの中で着実に成長していきます。それは人の思いや考えや願いをはるかに超えたものです。このたとえから私たちは大切なことを教えられます。まず一つが、神の国の成長のためには、ある一定の時間が必要だということです。そこに私たちも忍耐を働かせなければなりません。二つ目が、神の国の宣教は、神と人との共同作業です。つまり、農夫が種を蒔くように御国の福音を宣教するのは人のわざですが、神の国を成長させ、完成させてくださるのは主の働きです。

そして最後に「実が熟する時」すなわち収穫の時が来ます。福音宣教の実を刈り取ると解釈する方もおられますが、これは、むしろ、御国の完成の時、世の終わりの時を表しています。この収穫の時は、定められた時に、突然やって来るもので、まさに人の歴史に神が決定的に介入され、ご自身の完全な支配を確立されることを意味しています。マタイの福音書13章30節にありますように、イエス様ご自身が刈り入れを行い、毒麦と麦とを区別されるのが、まさに世の終わりの時になされる刈り入れです。そして毒麦は集めて焼かれ、麦は集めて倉に入れるように、そこには神のさばきと同時に、主の救いを待ち望む者には、神の国の完成、すなわち救いの完成を見させていただくのです。私たちは、日々の生活に追われて、収穫の時を思い見る余裕がないかもしれませんし、「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」（ペテロの手紙第二3章4節）と私たちの信仰を惑わすような教えを語る人も出てくるかもしれません。しかし私たちは収穫の時がいっつも来てもいいように備えをしなければなりません。御国は確かに今も成長し続け、間違いなく収穫の時は刻一刻と近づいているからです。

5月31日(土) マルコの福音書4章30～34節

「それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときには、地に蒔かれる種の中で、一番小さいのですが、それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」(31、32節)

---

イエス様は神の国をからし種にたとえられました。からし種は、アブラナ科の野菜ですが、その種は種の中で一番小さいのに(31節)成長すると、どんな野菜よりも大きくなり、ユダヤでは3～4メートルくらいの高さにまで育ち、「大きな枝を張り、その陰に鳥が巣を作れるほど」(32節)にまでになります。このことについて地に蒔かれる種の中で、からし種が一番小さいわけではないとか、野菜が大きな枝を張るといふ表現がおかしいとか、いろいろと異論をはさむ人もありますが、ここで論ずべきは、そのようなことではなく、むしろ、神の国はその始まりは小さく、ゆっくりとではあっても大きく拡大していくということです。最初は、神の国はイエス様が来られたことによってもたらされました。しかし人々はイエス様をさげすみ、決して受け入れようとはしませんでした。そしてイエス様が選ばれた十二人の弟子たちもごく普通の人々でした。そして120人ほどがペンテコステに聖霊を受け、キリスト教会は世界規模から見れば本当に小さな集団として始まりましたが、その後、福音は変えられた弟子たちによって伝えられ、また回心したパウロが異邦人にまで福音を伝えたことで、神の国の福音は驚くべき広がりを見せていきました。まさに、イエス様が言われたとおりになったのです。からし種のような小さな福音が広がっていった要因には二つあります。まず一つが神の国の福音は、非常にダイナミックで生きて働いているということです。まさにからし種は小さくても、そこにいのちがあるので成長するように、神の国の福音は生き生きと働き、人々を次々と神の国の民としていくのです。二つ目が、からし種のような神の国が成長していくためには、神によって選ばれた人々の働きがどうしても必要だということです。先ほども申しましたが、12使徒を含む聖霊に満たされた人々の働きがなければ、決して神の国が前進し、成長することはなかったでしょう。今も神の国は成長しています。これから世の終わりに至るまで、世にあって神の国はからし種が成長するように、成長し続けていくことでしょう。そのためには、今も聖霊に満たされた人々が神によって選ばれ、その人々によって神の国が宣べ伝えられることで成長するのです。私たちも、神の国の成長のために用いられるお互いとさせていただきます。